



# 東九州支部報

## (社)日本山岳会東九州支部 創立50周年記念式典



50周年記念式典 (大分市・コンパルホールにて・平成22年11月6日)

### 《 も く じ 》

- 50周年記念行事を終えて…1
- 忘年登山・忘年会
  - 大障子岩……………2
  - 忘年会……………2
  - 越敷嶽・緩木山……………3
- 50周年国内山行報告
  - 大峰山……………3
  - 北岳……………4
  - 槍ヶ岳・穂高岳・赤石岳…5
  - 奥穂高岳……………6
  - 月例山行・金山……………7
  - キリマンジャロ登山・②…8
  - 犬塚三角点のおっちゃん…9
  - 高山病初体験・ペンリレー③ 10
  - 私の無名山ガイドブック 44…11
  - お知らせ……………11
  - 後記……………12

## て創立五〇周年記念行事を終えて

### 半世紀の歴史の再構築へ

支部長 梅木 秀徳

新年明けましておめでとうございます。今年も皆さんにとって良き年でありますようお祈りします。

昨年は東九州支部の創立五〇周年にあたり、記念式典などの一連の事業を無事、そして成功裡に終了することができました。大変ご苦労さまでした。これも、支部会員・会友各位のご尽力の結果と、厚く感謝いたします。とはいえ、決算などを含めて最終的なまとめは今後に残されています。あらためて、皆様方の最終的な努力を要請します。

支部としては、今回の事業を飛躍台として、次なる六〇周年へと踏み出さねばなりません。そのためにも、反省すべき点は十分に反省し、支部のアイデンティティーの確立、登山団体としていかにあるべきかを考えたいと思います。

日本山岳会は現在、会員の減少、高齢化、新法人化への模索など、いろいろな課題を抱えています。支部としてもまったく同様です。さらに、今回の活動を通じて、支部活性化のためのにも、検討を要するいくつかの問題が浮き彫りにされました。

その一つが、会員全員の支部への結集です。実行委員会の組織発足に際し、支部会員の全員に何らかの形で、委員会参加をお願いしましたものの、残念ながら一部会員の活動への参加が見られませんでした。諸般の事情があったものとは推測いたしますが、今後どう

組織するか、海外を含めて登山活動をどのように展開するか、会員としての資質を高めつつ、全員で力を合わせたものと思えます。お知恵を貸して下さい。

## 忘年登山会・忘年会 報告

加藤 英彦

毎年恒例となっている忘年登山会と忘年会、今年もおなじみの関西支部長・重廣恒夫さんを迎えて、さる二月一日（土） 一二日（日）の二日間で行った。以下、その報告である。

### 大障子岩（一四一三）

二月一日（土）、朝七時に大分を出発。それぞれ手配した車に便乗して朝の集合場所、竹田市玉来のマルシヨク駐車場に到着。合計七台の車が集結する。そこで本日の行動予定を話し合い、飯田車だけが前障子の林道を上って待機し、大障子から縦走してくる組と合流して林道に下るといふ計画で、飯田車は一人だけ前障子に向かって事前に出発する。他は全員揃ったところで重廣さんとあいさつして神原へ向かう。

神原にて『日本百名山祖母山登山口』の石碑を重廣さんに紹介して白水部落へと進む。以前とめたことがある広場にはロープが張ってあったが、一日だけの駐車だからよいだろうと判断してロープを



あげて駐車する。先に一人であつた渡部車が、そのすぐ上で脱輪していたが、下山後にみんなであげることにする。重廣さんの指導で、全員ストレッチ体操をして出発する。天候は曇っていて、上の方は視界がきか

ない。西さんは体調不良にて停滞するということ全員で一五名となり、九時ちょうど登りにかかる。昨年の忘年登山は雪の中の山歩きだったが、今年は雪のない冬の山である。登るに当たって天気もさえず、好天であれば見上げられる大障子の岩峰もガスの中になにも見えない。足もと少し湿った状態で、急登は滑りやすくなっている。



八丁越の事前、縦走路に出るやや手前で登路をはずれて、枯れたスズタケの中を登る。正規のルートはやや右上にあり、すぐそのルート戻り八丁越へ到着。このあたりから、ガスの中、小雨もようとなつてきた。風も出てきたのでそこで昼食とする。やや冷えてきて寒さを感じながらの昼食で、終わるとすぐに大障子をめざす。一二時四〇分山頂到着。チャレンジ

ジ四〇〇〇の横断幕を囲んで記念写真を撮り、バンザイのセレモニーをすませて、縦走するメンバー四人（重廣、久保、中島、遠江）はすぐに出発する。残りはまた往路を引き返す。途中、前障子で待機している飯田さんより、『縦走組はまだこない』と携帯に電話が入る。予定より時間をオーバーしているのか？

### 忘年会

本日の宿『あ祖母学舎』は竹田市教育委員会社会教育課の管理する、旧姥岳小学校の校舎で。これを改造して、祖母山麓体験交流施設として、一般に開放している安価で気軽に利用できる施設である。「遊ぼう」という言葉と、「祖母山」という名前を合体させ『あ祖母学舎』とネーミングしたという。

忘年会（平成22年12月11日（土）竹田市『あ祖母学舎』にて）

なるほど、泊るところも教室を改造して、二段ベッドであり、食堂や浴室等もすべて学校のイメージである。本日の宴会からの参加者も次々と到着。前障子へ縦走した五人組も林道を経由して下山してきて到着する。みんな、わかし湯





へ入り一息つく。

午後六時から忘年会の開始。会場はゆったりした食堂で、場所は貸切りで気がねする事もない宴会となる。料理は素朴なもので、鍋が温かくもてなしてくれる。飲み物はすべて持ち込みということで、ビール、酒、焼酎、ワインが揃い、つまみも持ってきたものを提供する。

西さんの司会で進行。最初に重廣さんからあいさつ。「チャレンジ四〇〇〇山も今年でまだ一三〇〇山ぐらいだ。このペースだとすべて達成するのは九〇歳くらいになりそう」という話である。

乾杯の音頭は最長老の甲斐(一)さんから。宴会が始まると恒例のみんが順番にひとことスピーチ。今年を振り返って、または近況報告などが続く。さらに、重廣さんから恒例のアシックスのTシャツのプレゼント。これまでの黒いものからグレーの新しいバージョンだ。全員がそれを見て記念撮影としゃれこむ。全員が揃って着て並んだ姿はカッコいい。

夜も更け、二次会では歌も飛び出し、大いに盛り上がった忘年会も一〇時過ぎにお開きとなる。

## 越敷岳(二〇六〇m)・ 緩木山(二〇四三m)

一、二日(日)、朝食後、登山しないで帰る組もあり、『あ祖母学舎』の前庭でストレッチ体操後、



(越敷岳山頂にて)

別れのあいさつ。登山組は分乗して登山口へ向かう。本日は合計一八名である。緩木神社の前を通過して大規模林道との交差点付近に駐車する。

本日のルートは越敷岳から緩木山で、九時一五分、まず越敷岳への登路をとる。西さんは緩木山頂で待つことにして、女性二人は緩木山へ向かう。越敷岳への登りは昨夜のアルコールが登るにつれて体の芯から発散していくのが体験できるといった登りである。巨岩の『仙人枕』を過ぎ、『挟み岩』を通過して展望台へ寄り道。落差八十八mの明神滝が素晴らしい。しかし、湧水期でほとんど涸れた状態だ。

縦走路に出ると前方に山の名の由来となった、甌(こしき)に似

た巨大な岩峰が見えてくる。岩峰の下の分岐を左へ、岩を右に巻いて『山賊岩』を経て一〇時二五分山頂着。全員揃ったところで記念撮影。快晴の天気で展望もよい。下山は同じく左に巻いて『明神水』を通過して岩峰を一周したかたちで分岐に戻り、あとは縦走路をアップダウンを繰り返していく。

小休止して間食タイムとする。そして、緩木山へと急ぐ。コールすると山頂では二人が先について待っている。少し時間も下がってきたのでペースを上げて、緩木山への最後の登りをとばす。

一二時三五分緩木山頂に全員到着。すぐに記念撮影をしてバンザイ。日向さん持参のシャンペンにて乾杯、そして西さんのヤッホーで今年の忘年登山のしめくくりをする。

昼食後下山。快調にとぼして、一四時半、今朝登り始めた登山口へ。ぐるりと一周したかたちで今日の行程を終える。この後、空港へと急ぐ重廣組を見送って、その場で解散。各車に分乗して帰途につく。毎年恒例行事となった重廣さんをまじえての忘年登山と忘年会。その都度いろんなことを教わりながら、東九州支部の行事に参加してくれる重廣さんに感謝しながら、また来年もどうぞといった気持ちで別れた次第である。

参加者：重廣、西、加藤、飯田、佐藤、中野、佐藤(壮)、久保、

(緩木山山頂にて)



(一)、石神、加藤(平)  
二日目のみ参加者：下川(智)

コースタイム

一二月一日(土) 7:00大分発→(8:00~8:15)竹田玉来→(8:40~9:00)白水登山口→9:30小休止→10:05小休止→10:40小休止→11:45(12:05)八丁越・昼食休憩→(12:40~12:50)大障子→13:25八丁越→15:40白水登山口着→16:20あ祖母学舎着→(18:00~22:00)忘年会  
一二月二日(日) 7:00朝食→8:00あ祖母学舎発→(9:10~9:15)越敷岳・緩木山登山口発→(9:35~9:50)展望台・挟み岩→10:10縦走路→(10:25~10:45)越敷岳→(11:55~12:05)祖母への縦走路分岐→(12:35~13:30)緩木山・昼食→14:30越敷岳・緩木山登山着

良泉の大峰山は一、三〇〇年前に

## 五〇周年国内山行記録

### (その一) 大峰山(山上ヶ岳二七 九)・八経ヶ岳(九五)

加藤英彦

七月一六日~一九日 参加者五名  
二〇〇四年に世界遺産(文化)に登録された熊野古道の中の、奈

えん 役の行者が開いたとされる修験発祥の地である。山上ヶ岳一帯は今でも女人禁制を頑なに守っている不思議な山である。友人がその山上ヶ岳山頂にある修験者の宿坊のひとつ「櫻本坊」の納所(支配人)をしている関係もあって今回の表敬訪問する目的もあって計画した。  
七月一六日別府港発一七日日大

阪南港着く地下鉄く近鉄と乗り継いで、下市口駅下車。タクシーで天川川合く洞川温泉經由登山口大峰大橋着。橋を渡ったところに



「従是女人結界」とある。ここから登りにかかるも、男性ばかりの世界となる。すれ違う人から「ようお参り」と声がかかる。皆修験者スタイルである。途中三ヶ所の茶屋と称する休憩所を過ぎて、登り三時間で宿坊「櫻本坊」着。

なる。

一八日、四時起床、ご来光は朝霧にかかってくるおがめず、五時三〇分、山上ヶ岳を登って縦走路を奥駆け道へと歩き始める。「懺悔、懺悔、六根清浄」と繰り返して

唱えながら、登ったり下ったりの厳しいコースを越えていった。「小笹宿」「阿弥陀森」「脇宿」などといった「塵」と称する行場をいくつも通り過ぎていった。「小普賢岳」「大普賢岳」を越え、サツマコロボく国見岳く稚児泊といた難所を下っていった。なにせ、いずれの名前もすべて修験の為の仏教用語であり、山の名前もすべてそのための名前を持ってつけているのが、この大峰連山の特徴である。

七曜岳を過ぎるところから天候も回復し、大峰の名峰が見渡せるようになる。この鞍部に昭和四〇年大阪工大ワングル部の遭難碑を見る。行者還岳の山頂へは、縦走路よりピストンして急斜面のしご場を下り着いたところに水場があり、水筒に満たす。すぐに新設の避難小屋がありその前で昼食をとる。一息入れて出発。だらだらとしたアップダウンを「一の多和」く「石休宿」とすぎ「奥駆出口」へ。ここは行者還トンネル西口へのルートがあるため、これから弥山へ登った登山者たちと多くすれちがって行った。理源大使像からは、長い縦走の疲れが出てきて、最後の木製の階段や、鉄梯子の登りをあえぎあえぎ最後の力を

ふりしぼって、弥山小屋へなんとか日暮れ前までに到着した。別ルートで登って待っていた女性グループと合流。夕食後はすぐに就寝時間となる。

一九日、四時起床、ヘッドランプを頼りに目の八経ヶ岳(近畿の最高峰・「仏教ヶ岳」とも呼ばれている)へ登る。すぐに、オオヤマレンゲを鹿の食害から守るためのネットがあり、扉を開いて入るとすぐにオオヤマレンゲの群落だ。今年は九重の獵師岳、鳴子岳でも見たが、さすが本場のオオヤマレンゲだ。数も多く、保護された効果がある。「天女花」「森の貴婦人」とも言われているが、本場で見るといちだと輝きを増している。



山頂でのご来光を好天のもと、

歓声を上げて見ることができた。

引き返して、小屋を落ち、下りにかかる。狼平までもオオヤマレンゲを保護するネットがあった。木製の階段を下り、避難小屋へ、頂仙岳を左に巻いてなおも下る。柄尾辻で小休止、ここからまた延々と下りで、やっとの思いで最後の金網でつくったステップ状の下りを、イヤと言うほど下ってやると天川川合へ下りつく。ここからバスで近鉄下市口駅へ、その日の大阪南港発のフェリーで翌日(二〇日)大分着。厳しい修験の山を体験した山行であった。メンバー：加藤英彦、久保洋一、下川幸一、中島洋祐、他一名

(その二)

## 南アルプス・北岳へ

加藤英彦

日本で二番目に高い山、北岳(3193m)に登って、白峰三山縦走予定で出かけた。広河原山荘を登って大樫沢を二俣へ。ここから右へ白根御池小屋を経由して急登の登り、草スベリを登って稜線(小太郎尾根)に出て、南アルプスの山々を眺望良くながめて、肩の小屋で昼食休憩。北岳山頂へはここから一ピッチ、山頂ではゆつくりと眺望を味わい、南アルプスの山々を体感。北岳山荘へ下っ



(北岳山頂にて)

ていき、宿をとる。

その夕方くらいから急に天気が悪化してきて、小屋をゆするような風もでてきた。翌一四日、早朝から昨夜来の風雨がやまず、一度間ノ岳へ向かうべく準備して小屋を出てみたが、風速三〇mぐらいの強風と横なぐりの雨である。小屋にいた連中も、ほとんど間ノ岳方面には出発していない。小屋番も無理をするなど忠告している。しばらく待機してみたが強風はおさまらず、明日も同じような天気だという予報である。急遽予定を変更して下山することにする。小屋から八本歯のコースへのコースをとる。北岳山頂を右へまくようにして八本歯のコース、次々と木製の階段が表れる。この悪天候



(北岳山頂直下より間ノ岳)



經由↓広河原(十五時五十六分着) 広河原山荘泊

八月十三日、広河原山荘発↓大権沢↓二俣↓白根御池小屋↓草スベリ↓北岳肩の小屋↓北岳↓北岳山荘泊

八月十四日、北岳山荘発↓八本苗のホル↓左俣コース↓二俣↓広河原↓甲府泊  
八月十五日、甲府↓静岡↓大阪↓神戸↓ダイアモンドフェリー↓大分港着

## ・(その三) 槍ヶ岳(奥穂高岳) 赤石岳

久保洋一

の中、登ってくる連中と階段をゆずりながらの下山となる。ホルより左俣へのコースはなおも階段を次々と下っていく。

最後、沢を渡り、雪渓を横切つて下り、昨日のコース二俣へ。ここから大権沢を下って広河原へ。このあたりまでくると天候も、荒れた風もおさまった様だったが、バスで甲府に出て一泊し帰途のついでに、今回の北岳は天候が急変して計画を変更したが、南アルプスの山の大きさを、たんとかがうることができた山行であった。

八月十一日大分港十九時三十分↓ダイアモンドフェリー↓神戸港↓新大阪↓名古屋↓塩尻↓甲府(十四時)↓バスにて↓夜叉神峠

私たちの目的の山は北アルプスの槍ヶ岳(奥穂高岳)と南アルプスの赤石岳(光岳)です。下川さんは始めての北アルプス、塩月さんも白馬は経験があるが槍穂は始めてのことです。  
九月一七日(金)、大分から陸路、松本へ向かう。高速道路を経由して九月一八日(土) 松本I.C. から沢渡着、タクシーで上高地。九時一五分着。九時二〇分上高地を出発、一三時五〇分槍沢ロッジ着。今日はここで泊まり。なんとここにはお風呂があった。  
九月一九日(日) 晴れ。二時四〇分ロッジ発。周りは真つ暗だ。星がいつぱいでている。ヘッドライトを頼りに登っていく。途中で

明るくなり西岳、赤沢山、常念岳がよく見える。槍岳山荘七時二五分着。ここで少し休んで四五分から槍ヶ岳(3,188m)に登り始め八時四五山頂着。例によって渋滞だ。山荘まで戻ってちよつと早い昼食?を取り九時四五分槍ヶ岳山荘出発。

さあ、これからいよいよ縦走が始まりだ。大喰岳(3,101m)、中岳(3,084m)を経て一二時三〇分南岳(3,032.7m)到着。二〇分程休憩しよ大キレットだ。ここで3人揃つて小用を!ちよつと緊張したのかな?キレットの途中で二匹の猿を見かけた。まばらに木はあるのかな?長谷川ビークを過ぎるときすがにキレットらしくなつて険しい。

前に縦走したときはほとんど記憶が無いくらいに難なく通過したように思うが、歳を取つたせいなのか、危険な箇所がたくさん目についた。それにしてもやはり北穂の登りはきついな。ほんとに飛驒泣きだわ。一六時三五分北穂高小屋到着。テラスで大キレットを見下ろしながらジョッキの生ビールで乾杯。ちよつと寒かつたけど。

九月二〇日(月) 雨時々曇り。六時〇〇分北穂高小屋発。雨だ。カッパを着て出発、すぐ裏の北穂高岳山頂で記念撮影。涸沢小屋への分岐から先は、雨で濡れているせいもあるが危険な箇所連続で慎重に慎重に通過した。大キレット以上に厳しい。八時三〇分涸沢

岳(3,101m)到着。ガスで全く眺望がきかなかつたのだが、一瞬だけガスがはれ奥穂高岳、ジャンダルムなどまじかに見ることが出来た。八時五〇分涸沢岳発九時五分奥穂高山荘着。山荘でラーメンを食べたりコーヒーを飲んだりしてゆつくりした。山荘にいたとでも綺麗な若い白人女性が印象に残る。一〇時五分奥穂高山荘発一〇時四五分奥穂高岳(3,188m)到着。ガスついでに周りの景色は何も見えない。記念撮影をしい一時五分山頂発。一三時一〇分紀美子平着。塩月さんがここに待機していてくれることになつたので下川さんと二人、空身で前穂高岳をピストン。前穂高岳(3,088m)はガスの為まったく眺望がきかない、しかもとても寒い。

紀美子平に戻り一四時一〇分下山開始。もう少し先を急がねばならないのだが中々思うように進まない。一五時五五分涸沢小屋着。時刻と下山後の行程を考え、ここでもう一泊することにした。小屋にて白ワインで乾杯。本当にお疲れ様でした。

九月二一日(火) 雨のち晴れ。六時一五分涸沢小屋発。七時三五分上高地着。バスにて沢渡へ。沢渡にて温泉に入り汗を流す。とてもいい泉質の湯だ。

九月二二日(水) 曇りのち晴れ。初めは静岡側だったが変更し、長野側から山に入ることにする。途中、道路工事でかなり回り道をしなが

やつこのことで一六時四五分しらびそ峠にたどり着く。ここから林道を通り大沢山荘を目指す予定だったが、林道が閉鎖されてい

る。テント泊の準備もしてないこの時間から三〜四時間のかけ大沢山荘に行つても営業してないときは大変なことになる。近くに

あるハイランドしらびそに行つて聞いてみると、もう何年も前から営業してないとのこと。(実はこの山荘は避難小屋だった。勉強不足)開いている近くの登山基地にあたる小屋を教えてもらおうとそれが聖光小屋だった。電話で予約を入れ、そちらへ向かう。一八時一五分聖光小屋着。ついて早々、管理人に厳しいお叱りをうける。前もって予約もなしに来るのが非常識だとのこと。一応電話予約を入れたのだからその時点で断ればよかったのになと思つたがここは我慢

しかもこの上の聖平小屋九月一九日でもう閉鎖しているし、多の小屋も赤石小屋と赤石避難小屋以外は閉鎖しているとのことだった。その上、この小屋も昨日までだったとのことでありあわせの材料で粗末な夕食となつた。ビールを飲んで二〇時三〇分就寝。

宿泊準備をしていない(山小屋頼り)の私たちは、この時点で当初の赤石岳から光岳までの縦走を残念せざるを得なくなつた。せめて赤石岳だけは登ろうと言うことに計画を変更。

九月二二日(水) 曇りのち晴れ。五時三五分聖光小屋発。小屋か

ら遠山川沿いに下り、秋葉街道(52号)に出る。ひたすら南下して水窪(みさくぼ)の先の向市場から左折し山越えだ。山住神社を経由して、森山バンガローを通り、春野町豊岡で362号線と合流。362号線を杉川沿いに登って行き一つ山を越えて境川ダムの先でやっと大井川沿いに出る。

一一時三〇分畑薙第二ダム手前の第一駐車場着。一二時〇〇分マイクロボス発。この先は東海ブオレストの所有地だ。マイカーは入れない。一三時〇〇分榎島ロッヂ着。風呂も広く快適で夕食は豪華で大満足。

九月二三日(木)雨、雹、雷、強風。三時五〇分ロッヂ出発。ヘッドライトを点け前日確認しておいた登山口に向け出発。途中ロッヂでもらったパンを食べ、八時三五分赤石小屋着。小屋に着いてしばらくすると風雨が激しくなり、おまけに雷も鳴り出した。小屋の人が無線で山頂の非難小屋に問い合わせると強風、雷、雹と最悪だとのこと。ここで泊まることに決定。

九月二四日(金)曇り。何度か夜中目を覚まし外の様子を見るがいつの間にか寝入る。午前二時下川さんが風がおさまっているようだから出発しませんでしたと起す。わかりましたと早速出発準備。二時四〇分赤石小屋発。三時一〇分富士見平。五時三〇分赤石岳(3,120m)。一等三角点の最高峰だ。幸いなことに360度の眺望

がきく。北の方には昨年登った、荒川三山、塩見岳、その先には北岳、甲斐駒ヶ岳も望める。富士山も雲から頭を出してはつきり近くに見える。後で聞くとずっと天気が悪かったらしいので私たちはとても幸運だったことになる。山頂は風もあり、とても寒いので記念撮影をして早々に下山。七時四

四五分赤石小屋着。小屋にてコーヒを飲み温まって八時五〇分まで赤石小屋の弁当を食べたり土産ものを買ったりしてゆっくりとした時間を過ごし、一四時〇〇分送迎バスにて榎島ロッヂ発。一四三時五分駐車場着。すぐ下の白樺荘の温泉に入り帰途につく。交代で運転し九月二五日(土)午前一一時大分に帰る。  
メンバー…塩月靖浩、下川幸一、久保洋一

## (その四) 奥穂高岳(三一九〇m)

加藤英彦

一〇月八日(十一日)  
「涸沢の紅葉を見ずして穂高を語ることはなかれ」と言われているくらいに涸沢の紅葉は素晴らしい。今回そのチャンスがあったので早速実行した。私の大学山岳部のOBの東京在住者の連中が、十月に涸沢に集まって紅葉を見るので来

ないかと誘いがあった。そこでその計画に便乗して穂高まで行くことにした。

一〇月八日大分発、JRにて名古屋乗り換え、松本へ。そして、新島々経由上高地へ。この日は日本山岳会の山研にお世話になる。上高地でこれだけ安く泊まれるところは少ない。これでもう何回か泊まったことになる。管理人もまた新しい人に代わっていた。

九日、起きてみると昨夜から降り始めていた雨が本降りとなる。東京の連中から携帯が入る。「横尾にテント泊しているが、この雨だと撤収して涸沢までは行かないだろう」と、とにかく横尾までというところで、雨の中スタートする。連休のためか、朝早くから登る人が大勢だ。かなりの人を追い越して行く。いつもの道を明神、徳沢と小休止をして横尾へ。道のすぐ脇に一行のテント二張りを見つけ、早速再開のあいさつをする。

どうしてもここから動かないと言う。我々三人は涸沢小屋へ入るといふと、途中まで送りましょうとのこと。雨の中を三人は大橋で帰り、もう二人は最後の涸沢まで一緒に来てすぐにとんぼ返り、横尾へ下っていった。

トも数多く見られる。詰め込まれた一室とストーブの熱気に耐えて一夜をすごす。

一〇日、午前五時前起床、六時四〇分小屋発。パノラマコースで奥穂へ。途中、見事な紅葉を見上げながらのゆっくりペースでザイテンへ。そして奥穂山荘へ、天候も回復してはいるがまだ霧の中だ。小屋よりハシゴを快適に登り奥穂山頂へ。はじめてのNさんと、三〇年ぶりというT君、しばしの感激にひたりながら、なおもガスがとれない山頂で記念撮影をする。あとは、小屋へ戻り、同じルートで涸沢へ下る。時間がたつにつれ天候が回復してきて、涸沢に下りつく頃はその見事な紅葉に見と



れる時間をたっぷりとって、連泊の涸沢ヒュッテへ。昨夜の部屋ではなく、ちよつと余裕のある部屋をあてがわれてゆつくりの一時で

あった。

十一日早朝の涸沢ヒュッテのテラスは大勢の人でにぎわっていた。ちよつどガスがあがって、涸沢の全体の見事な紅葉が見渡せるようになった時間、きせずしてそこにいあわせた人から歓声があがった。それほど素晴らしい紅葉を楽しむ時間を味わって、あとは下山へかかる。今日は連休最後の日でもほとんどが下山にかかる事のようにだ。横尾、徳沢、明神そして上高地へ、バスを待つ間上高地をしばし散策。ウエストン碑をみて上高地へにする。松本、名古屋と乗り継いで大分へは翌日の〇時三〇分到着でした。

メンバー：加藤英彦、会友中島洋祐、友人竹内義昭

## 涸沢の紅葉

中島洋祐

「涸沢の紅葉を見ずして穂高を語ることはなかれ」これは「涸沢ヒュッテ」の周辺案内パンフに書かれた言葉である。写真集、テレビ、新聞等で涸沢の紅葉の美しさは「筆舌に尽くしがたい」と多くの登山家や写真家に称賛されていたが、六九歳の今秋、正確には一〇月八日(金)〜一日(月)の奥穂高登山行程の二日間、この言葉の意味を体感出来たことは幸運であった。同行してくれた加藤氏と竹内氏と共に至福の瞬間を持つことが出来たのである。

上高地の「日本山岳会上高地山研」を出発した時は小雨であった。ずっと、小雨は降り続き、途中、明神岳も前穂高も見ることが出来ず、ただ、東京組みが待つ「横尾」へと歩いた。両氏は時々、初心者の私に「晴れていたら・・・だが」と説明してくれたが、その時には明神岳も前穂高もどんな山か、想像することは出来なかった。予定より早く「横尾」に到着し、東京組との再会を祝して乾杯した。東京組みは涸沢まで行くのを止め、小雨の中、我々に本谷橋まで随行してくれた。これは加藤氏と竹内氏の人間性からであろうか、それとも山男の絆であろうか。

雨の中でも涸沢に向かう老若男女の登山者は多く、噂の「山ガール」も拝見することが出来た。本谷橋周辺は紅葉しており、これが涸沢の紅葉であろうと想像した。本谷橋を過ぎ、高度が増すにつれ紅葉は赤と黄色を増してきた。小雨の降るなか、夕方には涸沢に到着した。天気予報では次の日もあまり期待できなかった。紅葉の季節、涸沢ヒュッテは何時も満員とのこと、我々の部屋には四枚の敷布団に枕が一二個も並べられていた。次から次と宿泊者は着き、翌朝、一〇名が寝ていたことが分かった。翌朝、晴天ではなかったが、まあまあ天気ななかをパノラマコース、ザイテングラードを経て奥穂高に向かった。涸沢カールではナナカマドの赤、ダケカンバの黄色、ハイマツの緑等、自然

の織りなす色彩を堪能しながら、奥穂高へと登り続けた。パノラマコース、ザイテングラードからのカールへの眺望は、更に各種テントの色が加わり、絵はがきそのものであった。ザイテングラードを登りつつ、休憩してはカールを眺め、疲れを癒した。ようやく着いた奥穂高山頂はガスに包まれていた。しかし、下山する頃には太陽が姿を現し、カール内の紅葉は太陽の光の中で更に輝いていた。夕刻であったが、木々、其々の色が光の中で輝きを増し、美しかった。涸沢ヒュッテ、キャンプ村、涸沢小屋の周辺いたるところで、多数の者がカメラを覗き込み、カールの紅葉を撮ろうとしていた。これが涸沢の紅葉と納得し、ビールで乾杯した。翌朝には更にすごい光景を見る



ことが出来た。五時頃、ヒュッテのテラス、キャンプ場周辺には数百人、いや、千人以上の者がざわめき、何かを期待していた。我々もその中にいたが、夜が明ける頃には北穂高、涸沢岳、涸沢槍の山頂にはガスがかかっていた。そのガスが流れると、太陽の光がそれらの山々をピンクに染め、ナナカマド、ダケカンバの紅葉、ハイマツの緑を更に輝かせ、モルゲンロートの状態となった。その瞬間、カール内に「おう！」の歓声が一斉に響き渡った。その神々しさ、美しさを私は言葉で表現する術を知らないが、それこそ「筆舌に尽くしがたい」光景なのである。



この秋、始めて奥穂高に登り、日本一の紅葉に触れる一瞬を経験したが、これも偏に加藤氏と竹内

氏のお陰であると感謝している。

## 月例山行報告

### 金三(967m)

(二月月例山行報告)

#### 牧野 信江

二月二十六日(日) 午前五時サニーを中野車で出発。別府で飯田氏、遠江氏が同乗する。別府ICから大分道に入り、鳥栖から長崎道へ。金立サービスイリアで久保車と合流。久保車には下川氏、石川氏が同乗。佐賀大和ICで高速を出て、佐賀・福岡県境の三瀬峠に向かって国道二六三号を北上開始。外気温度は〇度、曇り、天気予報は雪。国道を少し行ったら雪がちらつきはじめ、奥に進むほどに道路は白くなり、雪が本降りとなる。

背振山地は東西六〇百にわたって福岡県西部と佐賀県との境界をなす山稜である。福岡県側は急で、佐賀県側はなだらかになっていく。金山は主峰の背振山から西北約八百の位置にある。井原山はさらにその西約五百にある。玄界灘から風が吹き付けられ、この山稜が屏風のようになっているため、この辺は雪が深いという。

今年のテーマ「源流の峰をたずねて」。今日の目的の山は博多湾に注ぐ室見川と有明海に流れる嘉瀬川の源流をなすこの山系の井原山だが、遠路来て一山だけではもったいないと、最初に金山に登り、井原山へ縦走することとなった。三瀬村に入ると道路の雪も深くなり、国道から山中キャンプ場に分かれる地点で久保車にはチェーンが必要となる。雪の中を上り、山中キャンプ場入り口の、地蔵が祀ってあるお宮の前の小広場に車をとめる。降りしきる雪の中で準備にかかる。脚気地蔵の鳥居の前を通り、しばらくはコンクリート舗装だがやがて山道になる。雪は絶えず降り続いていて、木立があつて雪を防いでくれるもの、時おり風混じりの雪が頬にあたる。ふわふわ、さくさくとした新雪だ。九州自然歩道の標識がたっている。歩き始めて10分ほどで林道を横切る。アスファルト舗装の立派な林道(背振金山広域基幹林道)を横切り、その先からスギの植林地が自然林に変わる。傾斜はさほどきつくない歩きやすい。しかし、登るほどに雪は深くなる。金山山頂までの距離や背振山までの距離を書いた指標が点々とあり、登るほどにその距離が少しづつ減っていく。やがて、道の分岐に着く。指標があり、左に行けばアゴ坂峠、三瀬峠を経て井原山へ、金山、背振山は右だ。そこから一五分ほどの登りで稜線に着いた。縦走路は右に続いている。



(金山頂上にて)



いし、通行止めになったら国道を  
帰らなければならぬ。そうなる  
といっそう大変だ。など、いろいろ  
とる相談し、縦走は取りやめとな  
った。皆で一緒に写真を撮って往  
路を下山する。

降りしきる雪で、登りにつきた  
足跡もう消えている。落ち葉の上  
の積雪で何度も滑りこけかかる。  
一時四五分地蔵尊前に下山。キ  
ャンプ場で昼食をとろうと探すが、  
降りしきる雪の中、適当な場所が  
ない。ゲートボール場の休憩場所  
を見つけて、その中で弁当を開き  
かけるが、誰かが「帰りに三瀬そ  
ばを食べたい。美味しい店があ  
る」と言った。「うん、食べよう  
よ」「じゃあ、弁当はよしにして  
これからそこにそばを食べに行こ  
うよ」「それがいい」で、衆議一  
決。

左に五分ほど、雪の積もった金山  
山頂だ。一〇時三〇分着。厚い雪  
の帽子をかぶった一等三角点、九  
六七・三m。残念ながらあいにく  
の雪空で展望は得られない。木立  
の中なので風は感じないが、降り  
しきる雪に風の音が聞こえる。

予定ではここから皆は三瀬峠を  
経て井原山へ縦走し、中野さんだ  
け下って、車で古場岳の井原山登  
山口に迎えに回るはずだった。  
でも、来る時の雪道の運転で時間  
がかかり、ここまでの登りも時間  
が下がっている。天気の良い日  
でもここから井原山までは四時間  
は必要で、この雪道での縦走は五時  
間以上は必要だろう。井原山手前  
の稜線は吹きさらしで相当に体  
力を消耗するだろう。帰りの時刻  
が下がるに雪道の高速道路は危な

コースタイム：脚気地蔵尊前発九  
時一〇分↓林道九時二〇分↓アゴ  
坂峠への分岐一〇時一〇分↓金山  
山頂着一〇時三〇分↓一〇時四五  
分発↓脚気地蔵尊前着一〇時四五  
分  
参加者：西、飯田、下川、久保、  
中野、石川、遠江、牧野

### キリマンジャロ登山と サファリーの旅②

星子貞夫

12月28日 昨日の雨も上がり快  
晴の朝である。キリマンジャロの  
姿が大きい。昨夜の雨が上では雪  
だったのだ。全山真っ白である。  
左側にマウエンジ峰(Mawenzi)の  
ハンス・メーヤー・ピークの尖峰  
が姿を見せている。朝の暖かい  
太陽を受けて、皆思もおもいに昨  
日の濡れものを樹木の枝に広げて  
干している。出発までの僅かな時  
間だがよく乾く。

8時30分に出発し写真を撮りな  
がら特に休憩もとらずゆっくりと  
歩く。途中小雨が降り曇り空とな  
る。12時30分にセカンド・ケープ  
と呼ばれるテント場(3500m)に着  
く。近くに溶岩の流れで出来た洞  
窟がある。かなり広く宿営出来る

が崩壊の危険があるので泊れない  
とゼベダヨが説明する。



12月28日 9時10分太陽がキリ  
マンジャロを赤く照らす。快晴で  
ある。明け方気温が下がったのだ  
らうテントに氷が張りついている。  
今日もゆっくりに行程で2時30分  
に三日目のテント場第三ケープ(3500m)に着く。ガスが巻いている  
が上空は晴れているらしく暖かい。  
ここからキボ・ハットに行くエ  
スケープ・ルートがある。キボ・  
サドルを通るならかな道である。  
昼食後高度順応のため1kmほど歩

から山の姿が全く見えなかったが、

いたが高度はさほど上がらなかつた。  
8時のテイー・タイムにサブ・  
ガイドのジャスティンからタンザ  
ニヤ国歌やキリマンジャロ賛歌を  
習う。隊員5人にそれぞれ国歌の  
歌詞を丁寧に書いて呉れた。

15時30分頃から又小雨模様とな  
る。キリマンジャロは単峰である。  
周囲の平原から抜き出ている。そ  
の地形の關係に起因する気象変化  
が午後雨、夜晴れ朝快晴のパター  
ンである。ここから300mから観察す  
ると、山裾から積乱雲が山をぐる  
りと取り巻くように幾つも立ち上  
がり、なかには崩れて『かなとこ  
雲』となって雷が鳴っている。上  
空には巻雲がたなびいている。山  
肌で温められた空気が上昇し、そ  
れを補うように雨を含んだ空気が  
山を包むのである。サファリー



から山の姿が全く見えなかったが、



これがこの時期の特徴なのだろう。

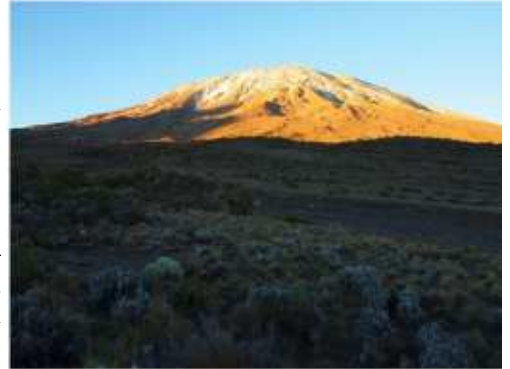
12月31日 6時30分起床、快晴である。眼下に雲海が広がり、キリマンジャロの東に位置するマウエンジヤロの裾にかり、キリマンジャロは朝日に赤く燃えている。毎日のことであるが全く風がない。

昨夜も「トリツトル」の排泄があり体調は良好である。コックの作る料理が口に合う。朝はパン夜はスパゲッティなど単調な献立だが口に合い、食欲も衰えない。全員元気である。

朝の陽光の中で朝食をとり、9時に出発する。傾斜が少し急になる。一回休息をとり登って行くと前方



に空色の構造物が見えて来た。今日の宿となるスクール・ハット(650m)である。



スクール・ハットは断崖の下の僅かな平地の建った小屋で、収容人員が人ぐらいで別棟がありソーラーシステムが設備してある。

キボ・ハットが満員で泊れないというロシヤ人の3人組みが移動してきた。早速ハラシヨと挨拶をする。その他アベックが一組とほか教組のメンバーで賑やかだ。

順応のため断崖の上まで一時間ほど登る。今夜は満月である。夜は快晴であるが星は月の明かりで見えない。10cmほどもある厚いスポンジのベッドで熟睡する。

2010年1月1日 ウフル・ピーク

をあきらめギルマズ・ポイントから一気にキボ・ハットに下る。地図の上ではキボ・ハットとスクール・ハットは頂上まで同じ距離のようであるが、スクール・ハットからのほうが遠く感じた。ここで下川氏の元気な姿を見て安

心する。

ここから更になだらかなキボ・サドルを下りホロンボ・ハットに着く。夕方又雨である。ホロンボ・ハットは多くの登山者で賑わっている。ここでも記憶をさせられた。

1月2日 昨夜の雨も止み朝日を正面にうけて赤く輝いているキリマンジャロの上に残月が白く浮いている。なんだかみずばらしい姿だ。ロンガイ・ルートからみた雄々しさを感じない。

今日はサポートしてくれた現地の人達と別れる日である。チップを用意していたが、下山口ではなく朝食後にここで欲しいと言う。下山口の混雑を考慮しての事だ。

全員を集めて一人ひとり名前を呼んでチップ手渡す。あと教時間で彼らは義務から解



放されるのだ。全員が一斉にタンザニア賛歌を二曲歌いだした。我々もメモを片手に合唱に加わる。賛歌が終わるとタンザニア国歌を合唱してくれた。

登山中はチーフやサブ・ガイド以外の人達と話すことも無かったが我々の登山の成功と安全を祝って歌ってくれた優しさがうれしかった。音声入りの動画で収録できた。

マラング・ルートは道は広く車は通れないがそのくらいの幅で良く手入れが行き届いている。大勢の登山者の行き来で賑わっている。マラング・ゲートが近づくとこの人の子供達が我々を呼びとめた。見れば棒切れの先に小さなカ

メラオンを乗せて写真を撮られと言う。撮影代は500であった。チベットの子供は飢を欲しがったけれど、この子供達はギブ・アンド・テイクの精神である。マラング・ゲートに着く頃に雨となる。ゲートで又記憶し登頂証明書をもらう。

ここでガイド達と別れてジープでナカラ・ホテルに宿泊し翌日ジープでアリュエシヤに移動しここでシャトル・バスに乗り換え、モシを経由し国境の町マナングでタンザニア出国とケニヤ入国の手続きをして2時間ナイロビのホテルに着く。

今回日本山岳会の下川幸一氏と千葉県の芳山に所属している宮崎すみえさんと三人の旅行であった

が、若いお二人に大変世話になり有り難く感謝しています。宮崎さんとはアコンカグア以来の再会で懐かしく当時と変わらなくお元気でした。

終

### 犬塚三角点のおっちゃん

安部可人

寒波の中、少し膝痛、別にする事もなし、で原尻の滝の東、新鳴滝橋で緒方川の南側へ。新設農道は大野ICから15分。まず格三等二八六、三三、次馬背畑二三六、七m、今山磨崖仏の東五〇〇mの大化二七三、九m、鮎川二五八、四m。小野の要神社から東へ六三四線にもどる。下犬塚の記念碑から細道を左へ上り駐車、衛藤家の白いコンクリート納骨堂を左へ上り、竹ヤブの中一〇mに散乱した墓地、その先に犬塚三等二三九、七mあり。さあ早めに帰ろうか、とウターンのため北へ前進。坂の三叉路をバックする、と突然ガクンときて一瞬の恐怖。しかし不思議と平穏三日前、マウンテンバイクを盗まれ、また不幸かとあきらめの境地。

前の家からおっちゃんが出てくる。無理。JAFに電話、正解だった。三重からJAF車、一五分で到五回右後輪が浮き、ワイヤを調整。その時に助けてくれたあの甲斐さやっとなりて、見ると左の後輪、この世話好きの衛藤老人、よく話着。まずガラスの支柱からヤブの見事な作業で無キズで脱出成功。んだった。軟土に沈み、右がやっとなりて、す。「あの墓は移した事になつた。木の根もと(ちようどいいところ)この手際の良い人、二年前、農道転倒寸前。おっちゃん好意のトラでいる。あれは私の山……にあつた)へワイヤを張り、転倒空港近くの四等、石ノ元二三九。クターを出す、重いサーフでは(省略)」。防止。少しづつ後ろへ引っぱって、七m、その前の側溝に脱輪、何と

## アラベスク・ペンリレー (第三回)

### 支部報発刊五〇号記念企画

# 「高山病」初体験の苦い思い出

私は昭和四〇年、(今から四五年前)の七月二日、高度五、一二〇mの氷河の上に建てられたテントの中でもがき苦しんでいた。そこは日本からはるか離れたアフガニスタン・ヒンズクシ山脈の中部、コイモンディ峰(六二四八m)に挑戦中の第二キャンプであった。何も食べられず、頭痛と吐き気が続き、熱も出て、ただ高所服を着てシュラフに入ったままじっと動くこともできずに、頭をかかえたままの状態が続いていた。いわゆる高山病の症状だ。

思いおこせばこのヒンズクシ遠征隊は、大分県からの初の本格的な海外登山隊であり、六名の選ばれたメンバーで組織されていた。前年(昭和三九年)から計画、準備、資料集め、そして登山のトレーニングも一月の氷ノ山、三月の富士山と重ね、なんとか五月末に日本を立ち、アフガニスタンの首都、カブールへ。ここで種々の手続きを終え、六月一七日カブール出発、長い一二日間のキャラバンを終え、六月末から本格的な登山を開始。BC(四〇七〇m)からC1(四二三〇m)、そしてC2(五一二〇m)と順調に経過していった時である。そして私がC1からC2へと登っていった時、その症状があらわれたのである。

今では遠征隊は高度障害に対する対策はしっかりとしているが、その時は何の準備もしていなかったといってもいいだろう。「ダイアモックス」があるわけではなく、「パルスオキシメーター」や、まして「酸素ボンベ」なども装備の中にはなかった時代のことである。あったのは頭痛薬と風邪薬ぐらいであった。

さて、七月三日、そのC2から三人の隊員が当初の目的であるコイモンディにアタックし登頂に成功して、その夜は祝福の夜となった。私は祝宴にもかかわらず、依然として体調は変わらず、ただ寝込んでいただけであった。

それが高山病の苦しみなのだ。その時の苦しい体験が苦い思い出として今でも鮮明に頭に残っているのである。

そして、高山病対策の鉄則として高度を下げることで、つまりC2からC1へ下りることであった。翌日、一人とぼとぼとC1へ下っていった結果、その苦しみはやわらぎ、食欲も出て、体力は回復し、その二日後にはC1から五二八〇mの、前衛峰であるコイテイリ峰に挑んで登頂することができたのである。その、C2で倒れたままになっていた二日間、何も食べることもできず、苦しんだ体験は、今になってみればもうはるか四十五年前の、当時は二十三歳の出来事であったという思いだけで、かたづけられるほどの年月がたってしまったということである。

今回のこの文を綴るにあたり、昭和四十一年に発行された「コイモンディ峰登山報告書」や当時の新聞のスクラップなどをあらためて読み直してみるにつけ、その当時、これだけの遠征隊が大分県から組織されたこと自体が、特筆すべきことであり、又大変素晴らしい成果であったと思う。この遠征隊そのものが、当時の日本山岳会九州支部のバックアップがあってこそ成功したものである。よくこの遠征隊に参加できたと思うし、当時の貴重な体験ができたことは大変よかったものだ、あらためて思った次第である。

尚、この二ヶ月にわたる遠征隊の詳細なる映像が、カラーでハミリ映像で残されている。今でいう、動画(DVD)が見ることが出来る。いずれ機会があれば、皆様にも見ていただければと思っている。

次のペンリレーは甲斐一郎さんをお願いします。



飯田勝之

# 里山の稜線歩き

(その15)

杵築市山香の国道近くにある二つの小さな峰を紹介しよう。二つとも、古くから地域の里人たちの生活と関わりが深かったことが忍ばれる峰である。

## 「竹尾」 (たけお・198.9m)

山香町の東はずれにある、国道一〇号線のすぐ近くの小さな峰である。山香の東の端の瀬口の国道の旧バス停から大田村へ通じる県道国見山香線を一〇〇mほど入ったところの民家の裏に登り口に近い。大塚健二氏宅にお断りし、玄関前を横切って裏の稜線にとりつく。すぐにアンテナの脇を通り、左はスギ林、右は照葉樹林の植生境を十数分ほど登ると金比羅宮の祠がある。その脇を左に折れるように植生境をたどると植林地が終わり、両側が照葉樹の林となる。登り口からほとんど変わらぬ傾斜で登っており、祠から数分で山頂となる。

瀬口の里人たちの信仰の山である。南から西にかけてはスギの植林が山腹を覆っているが、山頂



・参考コースタイム 瀬口↓15分↓祠↓10分↓三角点↓7分↓祠↓10分↓瀬口  
(竹尾)

と斜面の急な北東側はカシ、タブ、の境界近くにある、上川久保バスツバキ、クロキなどの照葉樹の二北に入る細い車道がある。この道は国道からすぐに急坂となってJR陣田我王トンネルの上を通過して大久の集落へと通じている。国道から約七〇mで分岐があり、右に集落に通じる道を行くと、二〇〇mで右に入る分岐がある。これを入ると、すぐ先に分岐があるが直進すると荒れた林道になる。この分岐から林道歩きとなる。すぐ先に大きなため池がありこれを右に見て進むと、約二〇〇メートルで三叉路となり、左にいっそう荒れた林道を進む。緩やかな登りで林道は山腹を北向きにそして西向きへと大きく巻いて登っている。

## 「広瀬」 (ひろせ・382.5m)

これも山香町の東はずれにあり、前述の竹尾と、今畑川をはさんで対峙する丘陵状の峰である。付近はかつては薪炭林として絶えず伐採を繰り返されたに違いないが、近年は伐採されず、照葉樹の林が極相に近いまでになって山を覆っている。

この荒れ果てた林道は、緩い傾斜で山の東側から北側、西側そして南側をほぼ一周する形で山頂まで通じている。山の北側斜面はカシ、タブ、ツバキなどの照葉樹が広く茂り、南斜面は落葉樹も混じった二次林となっている。山頂の真北あたりから照葉樹の林を直登すると数分は早く登れる。頂上の北側手前には巨岩が点在する。この林一帯は、バブル期にゴルフ場の構想があり、林道はその開発準備のためにつくられたものという。

・参考コースタイム 大池↓4分  
三叉路↓35分・40分↓山頂  
・2万五千分の1地形図名 若宮



(広瀬)

# お知らせ

### 二月月例山行のご案内

・月 日：二月二〇日(日)  
・目的地：久住山(大分川・大野川・筑後川の源流の峰)  
・出発：二月二〇日(日) 午前六時サニー出発  
・現地集合：午前七時半・赤川温泉

### 三月月例山行のご案内

・月 日：三月二二日(土)一三日(日)  
・目的地：市房山(熊本県の球磨)

### 四月月例山行のご案内

・月 日：四月一〇日(日)  
・目的地：中ノ嶺(588.5m)  
(宮崎県の北川と番匠川の源流部の峰)  
・出発：四月一〇日 午前五時サニー出発。

韓国山岳会・蔚山支部との交流登山参加者募集

第七回を迎える日韓交流登山会は、今年是我が方が韓国を訪問する番です。  
予定月日：五月一日(日)〜五日(木)  
登る山：『智異山』  
(主峰・天王峰(チヨナンボ)は標高1915m、韓国本土最高峰)  
参加募集期限：三月一〇日まで  
(別添返信用はがきで)  
申し出先：事務局(サニースポーツ・097(532)0926)

昨年韓国から二一名が霧島山を訪れました。今年はこちらから出来るだけ沢山訪問したいものです。是非多数の参加希望をお願いします。

## 定期総会の案内

平成二三年度支部定期総会を次のとおり開催します。別添の返信用はがきにて、三月一日(木)までに**出欠の返事を必ず**出して

## 二二は何処?

・この写真は何処から何処を撮ったものでしょう?



・お分りの方は事務局まで はがきでお知らせ下さい。当たった方には記念品をさし上げます。(二名まで、正解多数の場合は抽選します。)

・締め切り 二月末日

※前回の正解は北アルプス・室堂平のミドリガ池から立山三山を撮ったものでした。

下さい。  
日時：四月一六日(土)  
午後六時より九時まで

場所：大分市府内町  
「コンパルホール・視聴覚室」

議題：

- ①平成二二年度事業報告
  - ②平成二二年度会計決算報告
  - ③平成二二年度会計監査報告
  - ④平成二三年度事業計画(案)  
(各種会議、年間各種行事、山行計画、その他)
  - ⑤平成二三年度会計予算(案)
  - ⑥役員改選
- 講演会  
梅木支部長の講演

## 支部役員会の開催について

日時：三月九日(水)

午後六時から  
場所：大分市府内町  
「コンパルホール」

議題：

- ①定期総会の議題等について
- ②五〇周年記念事業の  
総括について
- ③韓国山岳会との  
交流登山について
- ④その他

※各役員には別途案内状を出しませんが、**せんので忘れないように、是非出席して下さい。**

## 後記

○新雪を踏むというのは実に気持ちが良い。降り積もったばかりの雪を踏みながら登ると、心が洗われる。あとからあとから降ってくる雪に、雨具のフードを締めて、手もかじかむ寒さだが、心はどんどん冴えていく。普段ならうっとうしい気持ちになる、薄暗いスギ林の中も、雪が無い込むと明るい爽やかな林になる。雪は不思議だ。○雪が降って、鶴見の山肌が白くなるとじつとしてはおれない気持ちになる。靴とザックを車に積んで、いそいそと出かけたくなる。若い頃からその気持ちはちっとも変わっていない。実際に歩き始めると、若い時ほど踊るような軽い足取りではないが・・・

○今年の冬は雪が多い。寒さも厳しい。近年はアロエやブーゲンビリアやハイビスカスも、屋外においたままで越冬させてきたが、平気だった。ところが、年明けの寒波でみな霜煮えてしまった。でも、こんな寒さが昔は当たり前だったんだ。近くの小学校のプールに、氷が張って、子供たちが驚いて喜んで騒いでいるのが驚くのがおかしいんだ。

○そんなことを書きながら外を見ると粉雪が舞っている。部屋の中も寒い。手がかじかんで、PCのキーボードを打ち間違えてばかり。それでなくても打ち間違えが多いこのごろだが、この度の間違

いははつきり寒さのせいだと言いたい。

○五〇周年記念特集の号外を出して、ひと休みしていたら定期発行日が過ぎてしまった。何時も遅れ気味の定期発行、今回もやっぱり遅れた・・・

(K・I)

## 日本山岳会東九州支部報 52号

2011年(平成23年)1月25日(火)

発行者 梅木 秀徳

編集者 飯田 勝之

発行所 〒870-0021

大分市府内町1-3-20

サニースポーツ内 西孝子方

TEL・FAX 097-532-0926

題字 (故)佐藤正八